廣瀬雄一著『対馬海峡をめぐる先史考古学』(同成社2023年)を読んで

古　澤　義　久

2025年 9 月

『西海考古』第15号　抜刷

廣瀬雄一著『対馬海峡をめぐる先史考古学』(同成社2023年)を読んで

古澤　義久

１．緒言

本書は廣瀬雄一氏の40年間以上に及ぶ研究をまとめ、2022年に釜山大学校大学院に博士学位請求論文として提出された『대한해협을 둘러싼 신석기시대 교류연구（大韓海峡をめぐる新石器時代交流研究)』を日本語訳、補完修正したものである。新石器時代日韓交流の先達である廣瀬氏の半生をかけた研究の集大成ともいえるこの大著に対しては、すでに古門雅高氏が2023年11月30日に西海考古同人会のホームページで本書を紹介しているようにその学術的価値の高さは疑いようがない。(https://saikaikouko.jp/shintyaku/201021.html)。そのため、私のような者があれこれ論ずる必要はないが、価値ある本書を手に取って、目を通し、そしていろいろなことを感じたり、考える読者が少しでも増えることを願って一文を草することにした。

２．本書の構成と内容

本書は序章から第８章までの９章構成である。

序　章　本書の課題と展望
第１章　本書の構想と構成
第２章　韓日新石器時代交流史とその研究動向
第３章　すべては自然環境から始まる
第４章　土器から見える交流の世界
第５章　土器文化の融合と分離
第６章　石器・骨角器はどのように伝わったか
第７章　装身具はなぜ広域に伝わるのか
第８章　交流と先史社会の構造の変化

序章では研究視点および現状と課題が述べられる。主題としては対馬海峡をめぐる縄文時代の交流を扱うのであるが、交流の状況を探るということは縄文時代とは何かという問いに向き合うことであるとする。そして、この問いに対し廣瀬氏は多様なネットワークを持ちながら孤立することなくアジアの文化とも深く連動している一方、同時に固有の文化を維持する力が反作用としてアジア大陸文化との同化を拒む閉鎖的な性格を持ち合わせていたと縄文文化の二面性を喝破する。縄文社会の外縁部に位置する対馬海峡を越えてわずかではあってもなぜ縄文系遺物が存在するのかを解明することを目的とした研究である。

土器型式の相関関係と密度が交流の方向性が交流の方向性と頻度と解釈される傾向があり、土器の関係により交流の強弱と方向性など交流全体を判断することに疑義を唱えている。これは全くそのとおりで、大貫静夫氏も「土器自体が交渉をもちながら変容することと、一部の道具や装飾品が単体で伝わることは次元の異なることであり、同じ「交流」という言葉で一括しては歴史が見えなくなろう。」と述べたことがあった（大貫 2003)。

第１章では、土器偏重論に抗するために、韓国考古学で盛んに用いられているネットワーク論を応

用することを述べている。ネットワークを多元的に捉え、重層的ネットワークの観点から交流の実態を明らかにすると構想が示される。具体的には土器に反映された第１ネットワーク、石器や骨角器に反映された第２ネットワーク、装身具に反映された第３ネットワークという３つのネットワークが分析対象となる。

第２章では、日帝時代以来の日韓交流史研究の歩みがまとめられている。これまでの検討では遺物の個別的次元での研究が主流となっていたことや、石器・骨角器の共通性についての理解などを問題点として抽出している。

第３章では交流を検討する上で基礎となる自然環境について簡潔に整理されている。このなかで福江島から40㎞程度海上を進むと、計算上では福江島父ヶ岳と済州島漢拏山を同時にみることができることになるということは興味深く感じた。実際にこの海域で両者が同時にみられるのか船舶からの報告が気になるところである。

第４章では土器が検討される。高山里式土器に植物性繊維が混和されることに注目し、福岡市柏原Ｆ遺跡出土の植物繊維混和土器との関連についても想定の視野に入れている。近年、話題となった対馬市上対馬町若宮神社遺跡出土繊維混和土器の位置づけを考える上でも、日本海沿岸の繊維土器の様相整理は急務となっている。慶尚南道河東郡牧島で主体を占める無文の土器は、一般的には隆起文土器から瀛仙洞式に伴う土器と考えられているが、廣瀬氏は高山里式と隆起文土器の間に位置づける。その根拠としては全羅南道麗水市安島最下層出土の無文の土器と類似すること、隆起文土器から瀛仙洞式土器へ連続的な変化がみられ牧島出土土器が貫入する余地がないことなどを挙げている。そして大分県九重町二日市洞窟出土土器との関連性についても触れている。さらに釜山市朝島貝塚出土土器についても押型文土器や撚糸文土器の可能性を提示している。新石器時代早期の隆起文土器以前の土器と九州の土器の関連については不分明な部分が多いが、廣瀬氏は本書で比較的積極的に追究する姿勢をみせている。ただし交流自体としては断片的で土器の製作技術面が両地域で一部共有化された要素があるという状況が想定されている。

土器に本格的な関係がみられる時期として縄文時代早期後葉が挙げられている。佐賀市東名遺跡出土資料を中心に塞ノ神Ｂ式について口縁部・胴部形態と文様などから３段階の変遷が示される。安島貝塚Ⅰ層で出土した刺突文のある円筒形平底土器は塞ノ神式東名３段階のものであるとし、対馬市越高遺跡出土土器も塞ノ神式東名３段階のものであると考え、対馬経由で塞ノ神式が韓半島南海岸に到達したものとしている。

ところで、安島では苦浜式・轟１式に併行する縄文系土器が出土している。廣瀬氏の詳細な観察によると底部の作り方や隆起文の形状に差異があり、九州縄文土器の範型から逸脱しているとともに、塞ノ神式東名段階直後の苦浜式より１段階遅れる可能性も指摘された。また苦浜式は南九州を中心に分布するが、韓半島南海岸と直接の関係があったというより、福岡県下伊良原原田ノ谷遺跡などのように北部九州でも出土例があり、安島より九州に近い欲知島でも隆起文と貝殻条痕が施される土器が出土していることから分布論的な問題は解消されたとみた。欲知島の事例は従来、船元式ともみられた資料であるが、アカホヤ層の下層から出土しているため、轟１式頃の土器との関連を想定する新見解である。

安島のような隆起文土器直前、または隆起文土器の古い段階の交流について、東名をはじめとする新資料を踏まえた廣瀬氏の検討によって大幅に進展したところに意義が大いに認められる。ところで、興味深いのは、安島における交流の様相である。安島Ⅰ層で出土した縄文系土器には塞ノ神Ｂ式と苦浜式・轟Ａ式があり、時期差が認められることになっている。韓半島南部で縄文系土器はいつも出土

するほどは一般的な資料ではないので、時期の異なる縄文系土器が限られた地点で集中的に出土するということは、長期にわたって九州との交流拠点として営まれた遺跡という位置づけとなる。例えば、釜山市影島に立地する東三洞はそのような遺跡で、縄文時代各時期の縄文系土器が出土しており、長期間に亘る九州との交流拠点であった。ところが、九州に近接した東三洞とは異なり、安島は全羅南道麗水市に所在し、閑麗水道に浮かぶ金鰲島の南方沖合に立地し、安定的な交流拠点としては地理的に九州からやや離れている上、多島海の中で、この島が選択された必然性がわかりづらい。もちろんそれだけで安島が長期交流拠点ではないとすることはできず、十分可能性のあることではある。しかし、安島Ⅰ層で出土する縄文系土器が近接した一時期のもので、交流自体は短期間に収まっていたという可能性も今一つ考えることができるのではないだろうか。この可能性を棄却するには九州側での縄文土器編年上、確実に時期差を有するということをより明確に示す必要があるように思われる。

次に隆起文土器段階の交流について触れられる。九州における隆起文土器搬入品の出土例としては対馬市越高遺跡、夫婦石遺跡、壱岐市松崎遺跡、新上五島町頭ヶ浜白浜遺跡などが知られていた。このほかにもいくつかの遺跡で隆起文土器やその模倣土器が指摘されていたが、模倣品と轟Ｂ式の区別は困難で、縄文土器であるという反対意見もあった。廣瀬氏は本書で小値賀町野首遺跡と平戸市つぐめのはな遺跡の事例を隆起文系土器として認定したことは新しい指摘である。

越高遺跡の年代は隆起文土器に丸底がなく、屈曲形である轟３・４式と共伴関係があるため河仁秀編年（河仁秀 2012）の細竹型後葉から凡方型段階の隆起文土器と併行するとみる。従来、韓半島南部の隆起文土器と轟Ｂ式は何らかの関係があるとみられてきたが、廣瀬氏のライフワークともいえる屈曲型土器について、新資料を加え検討を深めた結果、その状況がかなり明らかになってきた。轟Ｂ式Ⅲａ類が韓半島南海岸に北上し煙台島の屈曲型土器を成立させるとともに、新岩里出土屈曲型土器は轟Ｂ式Ⅲｂ類と文様構成で共通性が認められ、Ⅲｂ類の豆粒文は越高遺跡出土品にもみられやはり関連性があるなどの指摘がなされた。このように轟Ｂ式の屈曲型土器の系統に対応するように韓半島南部でも屈曲型土器が存在することは相互の関連性をよく示している。

西唐津式についても標識資料である西唐津海底遺跡出土資料を中心とする検討により九州地域在地系土器文化に瀬戸内地域の土器情報、瀛仙洞式土器古段階と新段階など多系統の土器文化情報がわずかな期間に複雑に交差・複合した土器型式であると結論づけた。これまで瀛仙洞式との関係は一部の文様に限定され、単発的な影響が想定されてきたが、瀛仙洞式土器から複数回の影響を想定するのは斬新な考え方で、継続的な交流を想定させる。

第５章では曽畑式土器への展開が論じられる。文様だけでなく底部形態に着目し、金灘里Ⅰ式土器、区画反復文土器、瀛仙洞式土器、西唐津式土器、曽畑式土器を比較すると九州地域の土器と韓半島南部地域の土器は類似するということから金灘里Ⅰ式は曽畑式成立には関与できず、区画反復文土器が曽畑式成立に影響を与えた可能性は十分に認められるとした。西唐津式や曽畑式の胎土に含まれる青緑色鉱物を水滑石類と推定したが、この鉱物は龍の口岩周辺の非常に限定された地点に分布していることが確認され、滑石の供給元は西彼杵半島西岸を含む西彼杵変成岩の系統と判断している。そのため滑石が多く混和される曽畑式段階には西からの交流のベクトルが強くなると想定された。

縄文時代前期までは相互の土器に影響を与えるような動きがみられるのに対し、縄文時代中期・後期前半にはわずかな搬入品のみがみられるようになることについて、それぞれの社会で接触を最小限に限定して必要な物品のみを交換したという交流の様態の変化を読み取っている。そのため交流規模自体が小さかったと断定することは避けたいとしている。搬出入や影響の有無といった土器の動きがそのまま交流に反映されるわけではないとわかっていながらも、ついつい土器の動きからそのまま交

流の様相を考えがちであるが、本書は慎重な立場をとる。一方で、縄文時代中期以降一部の限定された地域で模倣土器が出土することから交流拠点が特定の地域に限定していたことを示すとし、限定された地域に定着した仲介者の存在を想定している。定着した仲介者は儀礼の一部を世代を超えて彼の地で受け継いだため模造再現された土器が現れたとみている。

第６章では石器や骨角器が対象となる。佐賀貝塚で多量に出土した打製石斧には大型魚類や海獣類、クジラ類の解体機能を持っていたという新たな可能性が指摘されている。使用痕分析や鯨骨等に残る切削痕との比較などで今後、検証されると興味深い。

日韓で共通する漁撈具としてしばしば挙げられる結合式釣針について菜畑14層から出土した釣針は側面結合式で縄文時代後期にはみられないことから縄文時代前期の可能性が高いと判断している。一方、縄文時代後期の下面結合式釣針の技術情報は逆に九州から韓半島南部へ拡散した情報とみなすなど、従来の一方向での伝播ではない新たな見解を示している。

第７章は装身具について扱われている。その伝播経路については諸説ある玦状耳飾は九州ではアカホヤ下位からも出土しているが、東北アジアで誕生した玦状耳飾が韓半島を通って西北九州に伝播し、南九州に拡散した可能性を考えている。玦状耳飾の時期的変遷が韓半島と九州で共通することから説得力がある。ただし、一方で廣瀬氏はほぼ同時期に沿海州から北海道と東北地域を経て北陸地域まで伝達する情報ルートの存在も考えられるとして北回りルートも想定しているが、こちらは沿アムール地域やサハリンで玦状耳飾が未だ確認されておらず、十分な証拠がないため、なぜそのように推定したのか理解がやや難しい。

廣瀬氏の見解で興味深かったのが、サメ・エイの椎骨製耳飾、刺突列のある骨角製垂飾りなどは新石器時代早期の韓半島南部と九州で共通しているが、骨角器なので白色石材である玦状耳飾を含む軟玉製装身具と情報のレベルで関連すると指摘していることである。廣瀬氏は土器や石器からは装身具の交流・交易を推定できるだけの資料はないと慎重な姿勢だが、本書第４章でみたように縄文時代早期後葉頃には交流があった可能性は十分にあろう。ベンケイガイ製貝釧はこれまで東三洞での未成品大量出土から九州への交易品として用いられたとも指摘されてきたが、廣瀬氏は対馬で出土するベンケイガイ製貝釧は搬入品である可能性が高いとした。

第８章はこれまでの議論を総括する。高山里式－縄文時代草創期後葉～早期中葉では狩猟石器に関連が想定されている。隆起文・瀛仙洞式－縄文時代早期後葉～前期前半では第１ネットワークが最も活性化して土器の搬入・在地化・融合がみられ、第２ネットワークとして石銛が彼我で共通する。また第３ネットワークに属する玦状耳飾が拡散する。水佳里Ⅰ式前半－縄文時代前期後半では第１ネットワークは弱化し、第２ネットワークでは磨製石斧のセットが共有される。第３ネットワークは玦状耳飾の情報が維持される。水佳里Ⅰ式後半－縄文時代中期には第１ネットワークは対馬に限定され、第２・第３ネットワークは不明確である。水佳里Ⅲ式－縄文時代後期前半になると第１ネットワークは土器の搬入と在地化はみられるが現地の土器には干渉しない。第２ネットワークは結合式釣針など漁撈具や素材などから技術関連交流の痕跡がみられる。第３ネットワークは貝釧や仮面型貝製品など多様な交流を示す。交流に仲介者の存在が明確になる。無文土器－縄文時代後期後半から晩期に外洋性漁撈は衰退する。第２ネットワークは初期農耕受容へと転換し、第３ネットワークとして支石墓が西北九州に伝えられる。

これらの変化の要因として気候変動と社会変化を挙げている。隆起文～瀛仙洞式の頃は寒冷な気候と温暖な気候が短期間に繰り返されアカホヤ火山灰も環境に影響を与える時期であった。そのため不安定な環境への対応として分散化と移住移動がなされた結果、相互の土器に影響を及んだとみている。

一方、水佳里Ⅲ期の土器交流が限定的な点は精神文化が異なる集団との接触は隔離され限定された空間で行われたものとみられ、地域社会が肥大化・安定化・組織化されると交流は、「排他的交流」の状態に進んだ可能性が高いからであるとした。

これまで混然と語られることが多かった縄文時代の日韓交流をさまざまな位相にわけて説明し、その要因を気候変動や社会変化に求めたという重要な研究成果である。以前、私は韓半島も含め東北アジア全体の文化動態を検討したところ、土器の分布様相と偶像・動物形製品の分布様相はほぼ重なることが明らかになったことがあった。これは土器が実用品としての性格を持つ一方、文様に代表されるように精神性をも併せ持っているためである（古澤 2018）。今回、廣瀬氏の検討では第１ネットワークと第３ネットワークは截然と分けて記述されているが、ネットワーク相互の関係は如何なるものであるか検討するのも興味深いと思う。特に土器の文様を一部でも受け入れている隆起文・瀛仙洞式期の精神文化上での交流の有無は重要な問題になってくると思われる。

３．本書の研究史的意義

以上のように、縄文時代の対馬海峡をめぐる日韓交流についてこれまでの検討を総合し、鮮明に描いたという点、また今後検討すべき課題を明確化したという点で本書の学術的価値は極めて高いと確信をもって言える。

それでは、本書は研究史上どのように位置づけられるだろうか。『西海考古』でこそ許されることと思うが、私の個人的体験を交えて述べたいと思う。

大学２年生だった2001年夏にソウルの国立中央博物館でみた新石器時代の土器の造形に感銘を受けたことをきっかけに韓国の新石器時代の土器を研究することにした。その中でも南部地域の新石器時代後・晩期の土器を対象としていたため、廣瀬雄一氏の論文（廣瀬 1989）は研究の良き手引きであった。日韓新石器時代合同研究会2003年佐賀大会が行われることを知り、合同研究会に初めて参加した。このとき廣瀬雄一氏にお会いした。また長崎県の正林護氏や高野晋司氏にもお会いした。廣瀬氏はよく知られているように1980年代から韓国新石器時代研究に邁進され、日韓交流研究の生き字引のような方であるが、日韓新石器時代合同学会もその立ち上げから深く関わり牽引してきた核心メンバーである。そのため、実際にお会いしたときはとても嬉しく感じたことをよく覚えている。

1995年に第１回日韓新石器時代研究会対馬大会が行われ、佐賀大会で第５回を数えていた。論文上でも1990年代末から2000年代初頭は鄭澄元氏、河仁秀氏（1998）、田中聡一氏（2000）、甲元眞之氏（2002）をはじめとする多くの研究者によって重要文献が発表され、日韓で出土する相互の遺物の集成が整備されることで研究が大きく進展しようとしていた頃であった。これから韓国学界との交流を深めていけば、もっともっと彼我で共通する要素がみつかって、対馬海峡という漁場を共有する漁撈民の交流がさらに鮮明になるはずだという学界全体の雰囲気はあったと思う。

そのため、その頃、このような日韓新石器合同研究会や九州縄文研究会をはじめとする学会で、日韓の新石器時代の交流の話になると、「曽畑式土器とか、結合式釣針とか西北九州と韓国は関係があるんだよ」ということをよく聞いたし、「曽畑式土器は関係があるっていうけれどあれは間違い。本当はその前の土器（西唐津式）が関係あるんだよ」と教えてくださる詳しい方もいらっしゃった。

ところが、新石器時代の中でも後・晩期を主に勉強していた私は、まわりの大人たちが、西北九州は韓国と交流があると言う割には、彼我の土器があまり似ておらず、関連遺物の個体数も少ないことに、釈然としない思いであった。まわりの大人たちがみんなそう言うのに、自分にはどうしても土器に影響関係があるようには思われないので不安になったあまり、もしかして水佳里Ⅲ期の台附土器

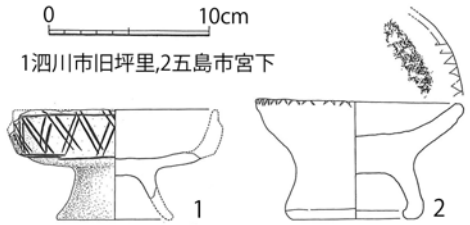

図　日韓における台附土器

（図の１）と北久根山式の台付鉢（図の２）は関係があったりするのかなあ､とあらぬ考えをしたこともあった（註)。

なにか腑に落ちない気持ちでいたところ、水ノ江和同2003「朝鮮海峡を越えた縄文時代の交流の意義」『考古学に学ぶ（Ⅱ)』が刊行された。ここでは①日韓間の交流はごくわずかであったことと（水ノ江説①)、②交流痕跡は視覚的な共通性のみで技術的な共通性がないことから言葉による意思疎通ができなかったという可能性（水ノ江説②）が提示された。このうち水ノ江説①について私にはまるで心の隙間を埋めるかのように感じられ、そうだよな、そんなに交流してないよなと、得心したのであった。そのように感じたのはどうやら私だけではなかったようで、その後、中堅・若手の研究者は水ノ江説①を支持する論文をたくさん書いており、私もその末席を汚している。ただ、その頃、木村幾多郎氏にお会いすると「環対馬海峡文化圏という言葉は使ったけれど、対馬海峡になんらかの文化的境界が存在したとはっきり書いているのだから（木村 2003 ほか)、若い人はそこを誤解しないでほしい」という話をされることもあった。水ノ江氏の主張はインパクトがあっただけに、「環対馬海峡文化圏」という言葉が独り歩きしてしまったために生じた、あたかも同一の文化を共有していたかのようなイメージは、明確に誤りであることはここでも述べておきたい。

2000年代初頭までの日韓交流積極肯定路線が、水ノ江氏の見解の登場以降、急に潮が引くように沈静ムードに変化したことは、それまでの日韓合同学会の盛り上がりに対する一種の揺り戻し・反動があったものと思う。

水ノ江氏はその後もこの考えを発展させていき、近年刊行された水ノ江氏の著書（水ノ江 2022)では縄文時代の日韓間において「交流」という術語を排し､「往き来」という言葉を用いるようになっている。そして水ノ江説②の言葉の問題についてもさらに踏み込み縄文時代には言葉の不通によって日韓の集団間の意思疎通が難しい時代が続き、水田農耕がはじまり支石墓が造営される弥生時代のはじまりになって言葉の壁を越えて意思疎通ができる通訳が現れたと指摘している。

2000年代後半から最近まで、この水ノ江説①は学界を席捲してきたが、ここで廣瀬氏の博士論文が公刊されたというのは交流研究新時代の幕開けともいえる。ご本人には失礼かもしれないが、廣瀬氏は学史的には交流積極肯定路線を採っていたとも言え、水ノ江説①にどのような対応がなされるのかが注目されたのであった。本書を通読して水ノ江説①については基本的に肯定的な評価をしつつ、個別の土器認定については土器文化の融合や変容をかなり積極的に認めており、若干の温度差はありそうである。また、水ノ江氏が「往き来」とした現象についても、廣瀬氏であれば「交流」という術語を使用するであろうことは本書の内容から明らかである。

この点に関して水ノ江氏も意思疎通をした上で精神文化に影響を及ぼしている可能性がある資料として縄文時代早期末葉～前期初頭の骨角・石製装身具文様を挙げている。そして廣瀬氏は第３ネットワークの中で、装身具文様に加え、サメ・エイ椎骨製耳栓を挙げている。私も廣瀬氏が指摘した新石器時代早・前期のサメ・エイ椎骨製耳栓に加え、新石器時代中期の土製耳栓についても着想伝播のような微弱ではあっても示される影響関係があるのではないかと考えた（古澤 2023)。

水ノ江説①は基本的には肯定できるものの、2020年代に入ってようやく、特に新石器時代早・前期に関しては若干の見直しが必要となってきており、ここで廣瀬氏の著作が重要な役割を果たしているといえる。そうした意味では雪崩のように学界を席捲した積極交流否定説の行き過ぎにブレーキをかけたのが本書の研究史上の意義となろう。20年にわたる沈静ムードに対する揺り戻し・反動が今、来

ているのかもしれない。

水ノ江説②に関して廣瀬氏は新石器時代晩期には交流に仲介者の存在を想定しているが、これはほかならぬ通訳を指しており、明確な反対姿勢を示している。そもそも水ノ江説②については、技術や約束事に共通性がうかがえないという事実から、意思疎通ができていないという想定が導出されているが、意思疎通ができても相手側がそれを採用しないという可能性や、意思疎通できた人々の及ぼす影響が微弱であったため普及に至らなかったという可能性などが必ずしも棄却できておらず、立論上の困難さがあると私は考えているので、廣瀬氏の反論には成立の余地が大いにあると思う。もちろん水ノ江説②も全く成立不能な仮説というわけではなく、可能性自体は十分にある。

本書では仲介者について次のように述べられ、結びの言葉となっている。

「この仲介者は安定した社会では極めて少数であるために土器型式に反映するような社会や文化に影響を与えず、集団間で選択されたモノを伝達させる役割を担っていた。この仲介者とそれを取り巻く社会的環境こそが、交流のパイプであった。仲介者は文化の創作や技術の革新には関与しない。したがってその存在を過大に評価してはならない。しかし、同時に無視できるほどの小さな異物として排除してよいものでもないのである。」

この結びの文章は、廣瀬氏の40年以上にわたる研究者としての研究活動とは別のもう一つの活動、すなわち日韓新石器学会をはじめとする合同学会や、彼我における考古学的活動における通訳及びコーディネート活動に裏打ちされたものであることを私達は知っている。通訳者は、あくまで裏方で、発表者以上に目立ってはならず、もちろん発表内容を“創作”してはいけない。さらに合同学会における通訳者は単に通訳に携わるだけではなく、双方からいろいろな要望が持ち込まれる、よろず相談窓口であり、交渉人でもある。まさに本書に指摘された仲介者の動きや働きと同じである。廣瀬氏は本書132頁註13でも縄文時代早期後葉から前期中葉までの時期を除外した時期の交流は制限交流（生活技術の模倣・生活・対人接触制限を設定）で、言語による意思疎通を通じた交換はあるが、社会や文化に対する関心を持たなかった社会的関係であると述べている。私も韓半島から渡航した人々は対馬島より南へ渡航できない障壁があったと想定したことがあるので（古澤 2018）、制限交流の考え方に親近感を抱く。この仲介者の話が、半生をかけた著作の締めくくりの文章に選択されたことには廣瀬氏のこれまでの思いが込められているのだろう。

通訳者である廣瀬雄一氏（申年）、田中聡一氏（酉年）、古澤（酉年）は、ほぼ干支一回りずつの年齢差があるが、韓半島新石器時代を専攻し、地方公務員（経験者）で、配偶者が韓国出身であるという共通点がある。あるとき、廣瀬氏はこうおっしゃった。「田中さんも古澤さんも博士なんだから自分も取らないと寂しい」。私達にもう一つの共通点が加わった。本当に嬉しい。研究仲間としても、通訳仲間としても。今回の博士論文の公刊に対して心からの、本当に心からのお祝いを申し上げ擱筆する。

【註】

註　もちろん関係はないと思う。田中聡一氏も同じように考えたようで、少し似たものがあるのは確かだが、その関係について積極的に考えていない（田中 2009）。

【文献】

〈日文〉
大貫静夫 2003「日本と大陸の交流」『東アジアと日本の考古学Ⅲ』同成社
木村幾多郎 2003「縄文時代の日韓交流」『東アジアと日本の考古学Ⅲ』同成社

甲元眞之・鄭澄元・河仁秀・小畑弘己・正林護・田中聡一・高野晋司 2002「先史時代の日韓交流試論」『青丘学術論集』20
田中聡一 2009「櫛目文土器との関係」『弥生時代の考古学 2　弥生文化誕生』同成社
廣瀬雄一 1989「韓国南部地方櫛目文後期の変遷」『九州考古学』64
古澤義久 2018『東北アジア先史文化の変遷と交流』六一書房
古澤義久 2023「耳栓からみた縄文時代日韓交流」『季刊考古学』別冊43
水ノ江和同 2003「朝鮮海峡を越えた縄文時代の交流の意義」『考古学に学ぶ（Ⅱ）』
水ノ江和同 2022『縄文人は海を越えたか？』朝日新聞出版
〈韓文〉
田中聡一 2000『韓国 中・南部地方 新石器時代 土器文化 研究』東亞大学校大学院博士論文
鄭澄元・河仁秀 1998「南海岸地方과 九州地域 新石器時代 文化交流研究」『韓国民族文化』12
河仁秀 2012「南海岸地域 隆起文土器 編年」『韓国 新石器文化의 様相과 展開』書景文化社